



古い昭和基地の建物

- 神田さんの写真を見て -

星合孝男

本誌の21号に掲載された45次隊長神田啓史さんの、「最近の昭和基地の建物」の写真が、色々な事を思い出させてくれた。おぼろになった記憶もあるが、以下、二三思い出した事を、写真の頁、順を追って書かせていただくことにする。

1. 発電棟

310頁右下に、昭和基地の中心部の写真がある。写真の中程にある赤



23次・24次隊が建設した発電棟（中程にある赤い2階建ての建物）

い2階建ての建物が目につく。23次と24次とで建てた発電棟である。23次隊は1982年1月6日から約1か月、この建物の基礎工事を行なった。極地研の竹内貞男さんが設営隊員として参加し、現場で采配を振った。2階建の建屋を乗せる基礎と、重い発電機を据える床を作る必要があった。そのために、鉄筋を入れた型枠に、大量の生コンクリートを打ち込む、という作業が毎日の仕事であった。

ネコと呼ばれる一輪車に生コンを受け、車を押しながら歩み板（道板）を渡り、目的の木枠の中に流し込むのである。作業は単なる肉体労働で、単純そのものであった。だが、天測点のある丘の北斜面西端から海への、緩やかではあるが下り勾配を、車を倒さないように、歩み板を踏みはずさないように歩くのは、結構力と注意のいる作業であった。年甲斐もなくこの作業に加わった。若い人達と同じ姿勢と威勢とで車を扱っていたつもりであったが、車に生コンを入

れる役の「ふじ」の乗員の目には、きっと心許なく映ったのであろう、私のネコに入る生コンの量がどうも少な目なのである。念のために、若い隊員のネコにスコップ何杯の生コンが入れられ、私ののに何杯入れられるのか、そっと数えてみた。明らかに、私の方が1、2杯少ないのである。何回か比べてみた。そして、この手心が毎度加えられていることがわかった。思わず心の中で有難うと言った。こうして基礎が固まった。

年が明けて24次の人達がやってきた。この年には佐野雅史さん指揮の下、建屋が建てられ、200KVAの発電機が据え付けられた。建物は日に日に、大きく高くなり、作業の進捗振りは、基礎コン打ちにはない華やかさを持っていた。23次の仲間は、最後の観測、引き継ぎ、帰り仕度をしながら、横目で組み上がっていく建物を見ていた。建ち上がった建物は堂々、颯爽と見えた。若い仲間の目にどう映ったかは知らないが、少なくとも私には、まぶしかった。もともと2年に亘る計画であり、作業手順も充分わかっているはずであった。基礎工事の意味も理解しているはずであった。しかし、子供っぽいというのか、心が狭いというのか、私の目にはこの建物が、まぶしくて致し方なかった。嬉々として建て前

式をする24次隊員を見て、23次の諸君が可哀想に思えた。

こんな事を思い出しながら、今改めて神田さんの写真の中央にある赤い発電棟を見ていると、かつてとは異なり建屋も基礎もない一つのものと思われ、不思議にこの建物が基地の要であるという感じが強くなってきた。

2. CB棟

頁を311頁に移す。左列中央の写真では、1次隊の建てた食堂棟が、黄色の通路棟を背に建っている。歴史的保存建物で、1次の食堂棟、後の娯楽棟（バー）であるという説明が添えられている。異を称えるつもりは毛頭ないが、今は亡き人を含め8次越冬の24人にとって、この棟は“CB棟”なのである。C=Chemistry



1次隊建設の食堂棟でありCB棟、後の娯楽棟（手前の赤い建物）

=化学、B=Biology=生物学である。1965年7次、「ふじ」の就航によって輸送能力が格段に向上した結果、昭和基地は拡大の道を歩みはじめた。8次の夏には5棟の建物が建設された。その一つが1次の食堂棟の北側に建てられた食堂棟である。サロンを伴う広い食事スペースは、はっきりと調理場と区切られていた。

古い食堂棟には広瀬豊ドクターと調理の鈴木和幸さんの居室と、観測用のスペースがあった。神田さんの写真には、この棟のドアがはっきりと写っているが、このドアを開けて入ると、一番奥に二つの居室が並んでいた。居室といっても、板と柵で仕切られ、部屋の出入口にはカーテンが吊り下がっているだけの、簡単な造りであった。当然、2人の住人が自分の部屋へ出入りする時には、観測スペースを突っ切らねばならなかった。古い食堂とはいっても、その一隅には調理場があり、流しがり取り付けられていた。水が使えたのである。水を使う化学、生物学の仕事がこの棟で行われることになった理由であろう。

鳥居鉄也隊長は化学者で、この年、西オングルにある大池の湖水の定期調査などの露岩湖沼の研究と、大気中の二酸化炭素の連続観測を行なっておられた。湖沼水の観測もさるこ

とながら、二酸化炭素観測のために観測スペースに備え付けた、東芝ベックマン社の連続分析装置と格闘される姿勢は印象的で、今でも目の前に浮かべることができる。後年、地球温暖化ガスとして問題になった、二酸化炭素の定量とその変動に着目された慧眼を、当時知る由もなかったのであったが。生物担当の隊員として観測スペースで仕事したのは、細菌の研究をした井上浩三さんと私であった。私の仕事場はドアを入れてすぐの所であり、ここで海水中の植物プランクトンや、海氷中に住む微小藻類の調査を行なった。仕事は順調に進んだから、このスペースは私にとって、この後に続く20年間の南極生物研究揺籃の場であった。

1970年、11次で再び越冬の機会に恵まれた。8次で始めた海水中の藻類の仕事を続けたいと考え、仕事場としてCB棟を使わせてもらいたいと願っていた。水商賣には水が不可欠だから、当然ここを使わせてもらえるものと信じ込んでいた。しかし現実は厳しかった。9次隊がこの棟をプールバーのある娯楽棟として使いはじめ、10次隊がこれを受け継いだ。両隊では越冬隊の円滑な運営に役立つ、意見交換、意思疎通の場でもあったということであった。11次でもプールバーの維持・運用が踏

襲されることになったのは、自然の成り行きであった。だがこの事は私個人にとって、まことに不都合であり、困惑した。幸い機械担当の岡本義久さん、金子信吾さんらが地学棟（1次の居住棟）に、流しと給排水の設備を取り付けてくれた。おかげで海氷中の藻類やそれを食べて育つミジンコの幼生の観察をすることができた。

さて、話を娯楽棟に戻す。1976年1月3日、17次隊の第1便がやって来た。このヘリコプターには極地研究所長の永田武先生が乗って来られた。先生はこの日以来基地で起居をし、みずほ観測拠点、やまと山脈滞在中の飛行隊の視察を含め、基地内外の視察をされた。基地に入られる際、東京築地で調達したという食材を持ち込まれていた。どうなさるおつもりか、と思っていると、基地へ到着して何日もしないうちに、「美味しい物を持ってきたので、皆に食べさせたい。」とおっしゃる。そこで娯楽棟のカウンター内で調理していただき、皆がご馳走になることにした。東京で雲の上の先生が、ここでは飲み屋のオヤジになり、隊員との団樂を楽しんでおられるかに見えた。この飲み屋は、16次、17次の越冬交替後までも続き、開店日数は48日に及んだ

由であった。

3. シンカンと11倉庫

最後の314頁左列上には、これ又8次の建物が写っている。観測棟である。建物の風下側に雪が吹き溜まらないように、床の下を風が吹き抜ける構造にした、最初の高床式の建物である。鉄骨を組んで作った台の上に、普通のプレハブの建物が乗っている。この新しい観測棟は新観測棟、略して“シンカン”と呼ばれた。外観だけでなく、内部も基地再開前の建物に比べて遥かに立派である。観測スペースと個室とが共存する様式ではあったが、個室の独立性は高くなっていた。私達の建物を民宿とすれば、シンカンはホテルの感があるように思えた。

この棟では超高層物理、電波科学、宇宙線の観測が行なわれ、それぞれの分野の平澤威男さん、西野正徳さ



8次隊建設の観測棟（新観測棟であったことから、略称はシンカン）

ん、石田喜雄さんと、雪氷の石田 完さんの4人が住んだ。ところでこのシンカンは、通路で連結された基地中心の建物群から離れた基地東の丘にあり、食事の度に戸外を歩かなくてはならず、厳寒期や荒天の日には重装備をする必要があった。石田さんは越冬の経験者であり、しかも積雪地での経験も豊富であるのに対し、他の3人は南極新人であった。3新人に配するにベテランの石田さんをもってしたのは、遭難事故を経験した隊長の、事故防止を念頭に置かれた結論ではなかったかと思うのである。シンカンと基地中心との間にはロープが張られ、その上視界の悪い時には、電話連絡で建物の出入りを確認しながらの往復がなされたのであった。

最近「極地」79号の「JARE44 オゾンホール観測」と題した44次越冬の佐藤 薫さんの文章にこんな一節のあるのを見つけた。 - 前からやってみたかった昭和基地の気象解析を始めた。(中略)8次隊の建てた歴史ある観測棟で、ひとりデータを眺め、解析していると、過去の観測隊の夏作業の様子や、越冬生活がありありと想像できるような気分になった。 - 今でもまぶたを閉じると、何時でも、ブリザードの中を、一列になってロープ伝いにやってくる

るシンカンの住人の姿も、そして観測棟の屋上で全天カメラのフィルム交換をする男の姿も思い浮かべることができる。

神田さんによれば、観測棟は45次でのガバリウム鋼板による外壁工事により、新しく見えるとのことである。写真でもそう見える。

化粧直しの終わった観測棟の写真の下には、古色蒼然とした11倉庫の写真がある。名前が示すように11次の夏に、観測棟(シンカン)の基地寄り手前に建てられた観測倉庫とともに建てられた。8次の頃、その後も多分、11次の2棟の倉庫が建つまでは、観測器材の一部は野外に野積みをし、シートで覆って積雪で埋った時の目印にと赤旗を縛り付けた。そして、必要な時、必要な物を取り出し、再びシートをかけるのであ



8次隊建設の11倉庫

た。屋内スペースが狭かったからである。装備用品、食糧などは、19広場から工作棟へかけての斜面に置かれていたが、11倉庫ができてからは、物品の保存状態が良くなっただけでなく、管理も容易になったことを実感した憶えがある。

神田さんの写真に触発されて、取り留めもなく昔話を書かせていただいたが、最後に、8次、11次の建物建設の計画にかかわり、現場での作業を主導されたのが、川口貞男さんであったことを、敬意と謝意を込めて加えさせていただく。

最後になってしまったが、写真の再掲にご同意下さった神田啓史さんに、厚く御礼を申し上げます。

(7次夏・海洋生物、8次冬・11次冬・生物、16次冬・隊長、23次冬・28次夏・隊長)

編集後記

神田啓史 大学共同利用機関法人
情報・システム研究機構 国立極地
研究所

〒173-8515 東京都板橋区加賀
1-9-10

Tel:03-3962-4761,Fax:03-3962-1525

E-mail: kanda@nipr.ac.jp